

思い出することなど

原 健三郎

平成15年の夏ころだったか、ある裁判官OBの会でお会いした小野寺規夫さんから、いま山梨学院大学に法科大学院を立ち上げる準備をしているが、協力してくれないか、と声を掛けられた。当時は東京高裁を定年退官して3年目で、東京簡裁で仕事をしていたところで、即答はできないものの、「山梨」と聞いて心が動かされた。というのは、40年も前に判事補として初めて赴任した場所が甲府地・家裁だったからで、まだ若かりし頃の思い出がよみがえってきた。当時の住まいは、愛宕山のふもとの所長官舎の裏手にあって、春には所長官舎の大きな池に棲みついている食用蛙の鳴き声に驚かされ、冬の晴れた日には雪をいただいた富士山の姿を望見することができたことなどなど。

当時は、司法改革の一環として、質・量ともに多彩な人材を法曹の世界へ受け入れるという理想の下に法科大学院を設立するという、熱気に溢れていた時代。なじみ深い甲府の地で、このような若い法曹を育てるという仕事に携わることができるのは素晴らしいことだと思い、小野寺さんの誘いを請けることにした。

承諾はしたものの、求められている「民事裁判実務」の講座でどのような授業をすればよいのか、皆目見当がつかない。聞いてみると、新しい制度では司法修習の期間が短縮されて、従来の前期（4月～7月）がほとんどなくなるといふ。そこでこれまで司法研修所が前期でやっていたことをロースクールでやってきてほしいというのが新制度の趣旨なのだと理解した。私たちの時代の

「前期」でやっていたこととは、事案の分析に欠かせないツールとしての要件事実の手法を使って論点を整理し、結論を導くということで、一種のカラチャーショックを受けたことを覚えていた。そこで小野寺さんからお借りした書記官研修所発行の本などを参考にしながら、民法の要件事実を考えさせる事例集を作成した。司法研修所発行の演習教材や「15題」などがまだ出ていないところで、かなり苦労したが、楽しい思い出である。

平成16年4月いよいよ開校したが、当初法学部の方の債権総論の授業を受け持つように求められた。今から思うと、新米教授の講義を受講した学生には申し訳なかったが、債権法を始めから読み直す契機となり、自分では大いに勉強になった。その後いよいよ法科大学院での「民事裁判実務」である。何といっても記憶に残るのは1期生の既習クラスで、小人数（たしか14名だったか）のゼミ形式で進めることができた。初めてのことで、毎回手探り状態だったが、これぞ従来型の一方通行の講義方式ではない法科大学院の授業だとの実感をもったものである。こうした議論のなかで、従来司法研修所の公式見解として言われてきたことへの疑問を感じるがあった。例えば「基づく履行」とか、貸借型契約では「期限を定めない契約は存在しない」、あるいは賃貸借契約終了に基づく建物明渡請求で「賃貸借契約終了時の建物の存在」などなど。後に赴任された山下教授と、これらの点を議論したことも楽しい思い出である。

ゼミ形式の授業については、その後数年間行っていた自主ゼミ（1年の前半は要件事実、後半は民事訴訟法）でも感じたことで、正規の講座ではないものの、法的思考の訓練にある程度役立ったのではないかと自負している。

大学院を去って数年たつが、授業時間が終わってまで質問に押しかけて来る熱心な学生の顔が走馬灯のように浮かび、楽しい時間を与えてくれた大学院に感謝の気持ちでいっぱいである。

ところが法科大学院制度の発足から10年余を経た今、多くの法科大学院が挫折し、実績のある我が校も廃止になるという。誠に残念である。そのうえ本来裏街道であったはずの予備試験が表通りになる勢いだという。法曹教育の将来

思い出すことなど

にとってまことに由々しき事態であるを考える。何とか再起の途はないのだろうか。